

---

# 硝煙の魔法

銅製シャベル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

硝煙の魔法

### 【Nコード】

N0428Z

### 【作者名】

銅製シャベル

### 【あらすじ】

魔術師、この世にあらざる力を持つ者たち。現代において彼らは結社を作り、その結社同士で世を忍び、争いあう。そんな中アーサー？レッドフィールドは戦う。上司の我が儘や親友の犠牲（大体アーサーのせい）を乗り越えて、ヒロインを救うことは出来るのか！？

処女作です。文章は拙いですが書き進めていくうちにレベルもあがる…ハズ！！読んでいただければ幸いです！！

R115は保険ではありません。普通に頭が弾けたり人体切断があります。

可能な限り毎日更新を続けていきたいと思っています！感想、悪い点、誤字脱字の指摘など歓迎しています！！

第五幕まで魔術師同士のバトルがありません。ご容赦願います。

## プロローグ（前書き）

どうも、銅製シャベルと申します。

処女作ですので、生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

## プロローグ

「ぐっ・・・ハッ・・・ハッ・・・」

ステイーブン・ドネガンは逃走していた。

彼はここしばらくクウエートで軍事作戦に駆り出されていた。

軍務の内容はいたって簡単、敵兵を見つけ配給されたアサルトライフルで撃ち抜く事だ。複数のチームに分かれ、ほぼ壊滅状態の敵兵を順調に追い詰めていた最中。

その時ソイツ（・・・）は現れた。

ソイツは八人からなるプロの軍人相手に真正面から立ちふさがる  
と、自分の名前を告げ、たった一人で退却をこちらに命じてきた。

こちらはプロ、おまけに八人の小隊だ。自負もあるし、自信もある。

返答は発砲で行われた。

その瞬間、彼らは狩人から獲物にその有り様を変えさせられた。

「止まるなマイク！その瞬間奴に・・・」

言いかけた途端に、タンツという軽い銃声と共に、逃げていた同僚の頭が弾ける。

（まただ）

彼の思考を恐怖が蝕んでいく。

（またたつた一発で・・・っ）

そう、先ほどから相手は一人につき一度しか銃弾を放たずに  
確実に殺している。

悪魔的な銃の腕だった。

（基地だ・・・）

この状況で生き延びるには

（とにかく基地に・・・っ）

そうして僅かな希望にすぎり、必死に走り続けるステイー

ブンの前で

基地の方角からツドオンツッ!!という轟音がこだました。

「……あ？」

思わず立ち止まったステイブンの前で巨大な火柱が立ち上がる。

燃えていく、

彼に残された僅かな希望が。

それをただ呆然と見ていることしかできないステイブンの後ろで

ざりっ、と悪魔の足音がした。

「お前たちの基地なら、今頃俺の仲間が爆破したところだが???どこに逃げるつもりだ？」

ゆっくりと、ゆっくりと彼は振り返る。

すぐその悪魔の青みがかった鋼色の瞳がこちらをじっと見つめていた。

「なんなんだ…。なんなんだよっ！おまえはあああああつっつ！……！」

「最初に名乗ったはずだがな」

絶叫するステイブンとは対照的に、悪魔は気だるげに告げた。

「魔術結社『梟』（ふくろう）所属、アーサー・レッドフィールドだ」

そして悪魔は引き金を引き、彼を速やかに殺害した。

## プロローグ（後書き）

ご意見、感想いただけると作者が喜び狂います。

## 第一幕（前書き）

ご意見、ご感想をお願い致します。



## 第一幕

アーサー？レットフィールドは傭兵である。

その戦闘能力は極めて高く、様々な国から依頼をされる程だ。そんな世界レベルの傭兵は緊張していた。

戦場で強敵と殺し合いをしているかのような緊張感。

アーサーが子供なら泣き出しそうな目で凝視しているのは

「トイレットペーパー??？」

主にロール状で販売されるあれである。

(やっぱりここは安いアメリカ製の??？いやしかし日本製の拭き心地に勝るものは???)

極めて真剣にアーサーがトイレットペーパーを眺めていると

「アーサー、さつさと決めないとまたボスに怒られるぞ」

そう言っただけで話しかけてきたのはニコラス？エイク。彼の親友であり、専属技師だ。

「むう????」

「はいはいもうこれで良いだろ、お前金持ちなんだから」

アーサーはまだ名残惜しげにしていたが、ニコラスは適当に幾つかのトイレットペーパーを掴むとさつさと会計を済ませてしまう。

実際アーサーは一回の仕事でこのトイレットペーパーなど苦にもならない程、金を稼いでいるので問題ないと言えば無いのだが

「しかしなあ、節制は大事だぞ。ほらちよつと前に流行ったじゃないか極東のmottainaiってやつ」

「良いから行こうぜ。またボスに地獄の連続100時間勤務させられるぞ」

「ボスは脳にアドレナリン射たせてでもやらせるからな…帰るか」

せかせかと近道のために路地裏を通るアーサー達。

だが、彼らはすんなり帰ることは出来なかった。

そこで女の子が横合いから、路地の物を蹴散らすようにして飛び出してきたからだった。

「ご丁寧<sup>ニ</sup>に彼女を追うようにして奇妙な格好の男まで登場してくる。

普通なら驚くなりなんなりしつつも、少女と一緒に逃げたりして、そこから物語が始まるのだろうか――

「チッ、一般人か？まあいいどうせ目撃者は始末おがっ」

「――アーサーは巻き込まれたくないし、いちいち聞くのも面倒だったので、とりあえず男の顔に銃弾を叩き込んだ（サイレンサー付き）。

「ええええええええ！？お前短気すぎじゃねえ！？」

「いやいやニコラス、なんか始末とか物騒なこと言ってたし、これで良いんだよ」

「いや、お前こいつが何か言う前にもう撃とうとしてただろーが！  
！見るよ逃げてた女の子、助けての『た』で口と顔固まっちゃまって  
るじゃねーか！！」

と、そこで件の『た』で止まっていた少女がようやく我にかえつたらしく

「え????あの????どういうことなの????」

まだ混乱が解けないようではあったが、とにかく少女が言葉を発すると

「良かったな通りすがりの少女取り敢えず俺は急いでいるので帰る  
じゃあな（超早口）」

「え?いやちよつとまっ????」

だが、アーサーは短距離走者のように美しいフォームで走り去ってしまっ。

「あーおい！待てよアーサー！えっとゴメンね、アイツ女の子っつ  
ーか女性全般と話すの苦手でさ、俺らこっぴつ者だから用事あった  
ら来て」

隣にいた男も慌ただしく名刺のような物を渡すと先にいった男を追いかけていくのを呆然と見送った少女はふと手の中の紙切れに目を落とす。

其処にはこんなことが書いてあった

何でも屋『梟』 社長との交渉次第で、社員が(???)何でもやります!!!

言いたいことは色々あるがひとまず

(社員に発言権は無いの???)

## 第一幕（後書き）

早くメインヒロインの名前出さなきゃ???

## 第二幕（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！！！！  
のたうちまわって喜んでいきます！！！！！！

## 第二幕

アーサー達が足早に向かったのは古びたビルだ。そこは現在『梟』の事務所として使われているのだが――

「おいニコラス、お前が先行けよ」

「え！？こんな時間まで遅れたの、お前があの変な奴に銃弾ぶちこんだ後『タイムセールだ！？これは見逃せん！』とか言っつて別の店に寄ろうとしたからじゃん！何で俺が先なんだよ」

「結局買えなかつたしな？？何なんだあのおばちゃん達の闘争心は、命の危機を感じたぞ」

「リアルに傭兵やつてるお前が言っつと洒落にならねえよ。…そろそろ現実逃避やめて入るか」

そんな感じでなんとも情けなく最強ランクの傭兵とその専属技師（戦歴12年）がドアを開けると

「遅いつ！！！！！！」

皆さんは刑事ドラマを見ることあるだろうか？そういうたドラマには大抵署長や警察庁官といった重役が出てくるものだ。そしてそういう人物は豪華な木製のでかい机に座っているだろう。

買い物から帰ってきたばかりの両手が塞がったアーサー達に投げつけられた（????????）のはそれだった。

アーサーは辛うじて不意打ち気味のその攻撃（結構速かった）を避けたのだが、技術屋のニコラスはその限りではなく

「ぐごあつ！？」

「ニコラス！うわ、仕事はできるように怪我させてる！？あんたとことん社員をこきつかうつもりですねボス！！」

「当然だ、私のために馬車馬のごとく働けよ奴れ？？社員」

「今絶対奴隷つていいかけましたよねえ！？」

そんなこんなで『梟』のボス登場。海島流衣、これでも日本人の女性である。

~~~~~  
~~~~~

「えつと???ここ、よね?」

そんな声をあげて路地裏の古びたビルの前に立ったのは西織夕香、アーサーが買い物帰りに助けた(?)少女である。

お礼を言う為???などではない。彼女は何でも屋『梟』——  
もつと言えばアーサーに依頼があつて来たのだ。

今現在、彼女は先ほどの男の仲間を追われている。このままで  
は遠からず捕まるだろう。

そんなことになったら何をされるか分かったものではない。

もつとも、もう逃げ続けるのは限界だ。ここを頼つて無理なら  
もう諦めて捕まるしかない。

そんな悲壮な覚悟で『梟』を訪ねた彼女は

「さーて、お前はまだ罰を受けてないわけだし私特製の新作尋問で  
も試してみるか?安心しろ、死ぬことはないから、たぶん」

「いやいや何でそこでたぶんって、あ、何か変な道具が出てき  
ダメ、すいませんでした謝るからアー————ツ!」

豪華な机に押し潰された男の隣で、ウインウインと音をたてる  
謎の道具を耳に突っ込まれている男を見た。

「というか彼女を助けた男だった。」

「ん?お客さんかな?ちょっと待っててくれすぐ終わるから」

「止めてくださいボス!このままだと耳から出ちゃいけないものが  
!」

西織は本気で帰ろうかと思った。

「で、ここに来たということは何かの依頼でしょうか?話を訊かせて

くれる?」

「あ、はい」

あのあと何とか場の收拾をして、今は話を聞いているところである。(机の直撃を食らったニコラスは脳震盪を起こしていたので別室で寝ている)

「あの、私今追われていて、死にそうになってるんです。そこのです?」

「アーサーだ」

「アーサーさんは私を追っていた男を見たと思うんですが。そいつの組織に追われてて?」

「映画みたいな話だねえ。追ってる奴らについて何かわかるかい?」  
「プロメテウスって名乗ってました」

何の気無しに答えた瞬間、西織は天井を向いていた。訳もわからず起き上がるうとして、喉にヒヤリとした感触を覚える。

「え?????」

「質問だ。嘘をついたら殺す。誠心誠意正直に答える。もし嘘をついたら」

アーサーが告げながら片手を西織の右肩におく。

直後、ゴギンツという音と共に西織の肩が外れた。

「—————!!!????」

経験したことの無い激痛に全身を震わせるが、重心を押さえて組伏せられている上に、喉元の冷たい感触が西織の体を強張らせる。  
「今のを全身の関節でやる。では最初の質問だ『結社』『魔術』『魔法』これらの単語に聞き覚えは?」

「????ツク、あり、ます」

「具体的な説明は出来るか?」

「はい」

「やってみせる」



「結社は魔術師が作る様々な規模の組織です。魔術師が扱う技術は魔法と魔術の二種類があります。」

魔術は『概念強化』であり、付与した魔力量に応じて刀の切れ味を上げたり物の強度を上げたりすることができます。

魔法は魔術と違い一種類の事象しか起こせませんが、魔術と異なり物理法則を大きく越えた現象を起こせます。魔法は魔術師ごとに異なり、魔力が情報構築体から人の精神を通じて現界するため、その人間の精神の有りようによって魔法が決定されると言われています。」

「お前は魔術師か？」

「は、はい」

「では次の質問だ???お前はどこの結社の人間だ？」

「???私は父の結社の人間ですが、潰されました」

「プロメテウスにか？」

西織は頷いた。

「プロメテウスは何のためにそんなことを？」

「父は魔術師でしたが優秀な科学者でもありません」

「西織博士、ノーベル科学賞受賞者、日本を代表する科学者で一人娘の西織夕香がいる。そして一週間程前に失踪してる。科学技術は応用すれば魔法の応用性グンと増す。プロメテウスの狙いは新種の科学技術とかかな。その子は人質でしょ」

海島がキーボードを叩きながら言う。

「それでは最後の質問だ。お前の魔法は、一体なんだ？」

「私の、魔法は???」

ここで西織は口ごもった。先ほど西織が言ったように魔法というものは魔術師の精神によって決定される。

つまりその人間の心の一番奥底にある欲望を反映するのだ。

己の魔法を教えると言うのは魔術師にとって、その心のうちをさらけ出すことに等しい。

が、アーサーにとってそんなことは知ったことではない。  
容赦なく左肩を外した。

「ッあああッ!!」

「早く答える。それとも今度は脚を外すか？」

「?????は。時間を少し、巻き戻す力です」

「タイムリープか、成る程、後悔してばかりといった顔をしている」  
そう言っつてアーサーは西織の上からどきー両肩を勢いよく  
はめ直した。

「いっーいっーいっーいっーいっーぎっ」

外された時以上の激痛が走り、せつかく解放されたのに痛みで  
立ち上がれなくなってしまう。蹲って体を震わせていると

「悪いわねえ、うちはいろんな結社から恨まれてるし、プロメテウ  
スみたいな大物結社ともなると警戒せざるを得ないのよ」

まったく悪いと思っつてなさそうな顔で、笑いながら海島が言う。

ヨロヨロと西織が席にもたれるように座ると

「で、依頼は護衛任務でいいわけ？なら今日からうちで匿うけど」

「断るとは、思わないんですか」

「そんな余裕あるの？」

ニヤリ、と悪魔のように笑っつて海島は手を差し出す。

「握手で契約成立よ。依頼するなら握りなさい」

西織は少し肩の痛みに耐えるように目をつむり、握手をした。  
こうして契約は成立した。

## 第二幕（後書き）

ちよつとしたキャラ紹介をば

アーサー？レッドフィールド

18歳

黒髪に青みがかった灰色の目

筋肉質だが筋肉モリモリというわけではない。所謂細マッチョ傭兵としての実力は化物クラス。魔術、魔法なしで歩兵一個大隊レベルの戦術的価値を発揮する。が、交渉事は苦手なので海島に仕事の斡旋を頼み、がつつり仲介料をとられている。

魔法：未明

西織夕香

17歳

黒髪黒目

中肉中背。

特に鍛えてもいない。

父を慕っているが、その父が失踪、自身も命を狙われる。アーサー達に護衛を頼むがそこでも押し倒されたり、ナイフ喉に当てられたり、両肩の関節外されたり、とどうにも不幸な人。父から優秀な頭脳を受け継いでおり、IQ550を誇る。だが不幸。

魔法：『タイムリープ時空復路』記憶を保ったまま任意の時間に帰ることができる。ただし巻き戻る時間が長い程魔力消費は大きくなり、時間設定の精度も落ちる。また発動に一秒ほどの集中が必要なので、不意打ちに極端に弱い。

ニコラス？エイク

19歳

金髪青目

体はそれなりに鍛えているが、あくまで技師としての作業の為。アーサーを止めようとして失敗してひどい目に遭ったり、海島を止めようとして失敗してひどい目に遭ったりする。西織のように不幸と言っより周囲に意図的に貧乏くじを引かされ続ける人。哀れ。

魔法・未明

海島流衣

年を聞く勇気が誰にもない

黒髪黒目

全身猫科の肉食獣を思わせる引き締まり方。

『梟』のボス。強い、鬼強い、とにかく強い。魔術、魔法有りならアーサーと互角に戦える。おまけに魔法がたちが悪い。アーサー曰く「あの人と戦っくらいなら軍隊に突っ込む方がまし」

魔法・未明

## 第三幕（前書き）

感想、誤字脱字の報告等いただけると嬉しいです。

### 第三幕

あの後一通り契約内容を煮詰めると、海島はアーサーに部屋の案内をさせた。このビルは五階建てになっているのだが、ビルごと買い上げた『梟』によって勝手に改装されており、迷路じみた通路と大量の罠が仕掛けられているため初めて入った人間にはいささか以上に危険なのだ。

アーサーに先導されながら西織が両肩の調子を確認していると「あまり動かさない方がいい、自分でやっておいて何だが、一度抜けた関節は抜けやすくなるからな」

「えっ？はい、ありがとうございます」

カンカン、と音をたてて階段を昇っていくと

「落ち着いているな」

「え？」

「さっき自分を組伏せて尋問した人間と一緒にいるのに、随分と冷静だなと思ってな」

「いえ、違う結社に助けを求めるなんて、本当は殺されたって文句は言えませんから」

「ならなおさらだろう。敵の本丸のど真ん中に居るようなものだぞ？」

「私はもうどこの結社にも属してませんし???それに傭兵と言うのは信用商売でしょう?依頼人を簡単に殺すような人間は雇って貰えないでしょうし、ましてや私は護衛任務を頼んだわけですから、簡単には殺されませんよ。ここに来るまでに何人かに話を聞いておいたから行方不明になれば騒ぎになりますしね」

「????ボンヤリしているようで抜け目ないな君は。それでプロメテウスに見つかるとは思わないのか？」

「もう見つかつてると思いますけど???どうも搜索系の魔法の使い手がいるみたいですから隠れても無駄です。真っ正面から守り

続けられるだけの力がないと無理ですから、ここで試してみようかと」

「戦うのは俺たちなんだが？」

「私を助けたとき躊躇なくあの男を撃つたでしょう？ 後ろに誰がついているのかわからない状況であんなことをするのは大抵の相手なら力づくでねじ伏せたり、逃げ切ったりする自信が無くちゃ出来ないことです。海島さんがプロメテウスを大物といったわりに、すんなり護衛任務何ていう難しい依頼を受けて、しかも逃げないところを見ると、相当戦闘に自信があるんでしょうね」

「全て計算ずくか？？俺たちが魔術結社だったのにも気付いてたのか？」

「まさか、そこまではわかりませんよ。ですがまあ結果的にはラッキーでしたね。結社には結社を、これで最初考えてたより有利になりました。それを考えれば両肩脱臼なんて安いものです」

「俺の回りにはどうしてこうもたくましい女性ばかり集まるんだ？？？」

アーサーが嘆息するが、当然それで御淑やかで儂げな女性が出てくるはずもなく

「まあ安心しな。今夜はゆっくり眠るといい、俺たちがあんたを守るからさ」

「長い付き合いになりそうですし、西織で結構です」

「なら俺もアーサーで良い。宜しくな西織」

「ええ、こちらこそ」

そう言っつて二人は握手を交わした。

~~~~~

二人の様子を窓の外から望遠カメラで覗き見る影があった。

「こちら 1コードネーム『CC』確認しました」

「こちら 2『CC』の滞在先は『梟』と判明」

「『梟』！？戦闘系ではトップの結社だぞ！？」

「サーモグラフィーによると『梟』メンバーと思われる人影はおよそ3、こちらの突入班の人数は30です」

「足りんな？？？本部から応援と装備を取り寄せろ。現状は引き続き監視を行う」

「 1了解」

「 2了解」

（本部から応援が届くまでおおよそ二日間？？？軽い下準備も済ませしておく）

人影はビルの上を軽々と飛び回り、町中に拡散していく。

夜の街に魔術師達が暗躍し、来るべき戦いに向けて己の牙を研いでいく。



## 第三幕（後書き）

あと一話おいてバトルです

## 第四幕（前書き）

感想や、誤字脱字、悪い点等指摘してくださると嬉しいです。

## 第四幕

(昨夜は特に襲撃もなく明けた、か)

海島は机に肘をついて考える。

(おそらく私たちが『梟』であることをふまえての対応??となれば襲撃には準備をしてから来るだろう。ここで一度逃げることもできるが、逃げ回ってばかりいては何時までも襲撃は止まないだろうし、一度襲撃をわざと受けて敵を根から断たなければ意味がない。プロメテウスのような巨大な結社がいくら高名とはいえ、一人の科学者に総力をあげているとも考えにくい。事実そうならあの子はとっくに捕まっているだろうし)

となれば一部の派閥の独断で行われた作戦なのだろう。ならばその派閥を潰し示談に持ち込むのが最良だ。

もつとも、

まだ西織がプロメテウスのスパイである可能性は有るのだが。

(まあ一先ず襲撃されるまで下準備をしながら待つか、このビルは既に私の魔法で要塞化してあるし)

西織がこの時期に依頼をしてきたのもラッキーだった。実のところこのビルはもうすぐ出ていくつもりだったのだ。付近のビルは無人大し、気兼ねなく暴れられる。

そういうわけで

「アーサー!!」

「はい、何でしょうかボス」

「こいつを西織に飲ませておけ」

そう言っつて海島はいくつかのカプセルを手渡した。

「発信器ですか？」

「と、何種類かの毒物だ。カプセルは一定時間で溶けるようになっているから飲ませても一定時間以内に解毒剤を射てば死なん」

「保険、ですか」

「奴の生殺与奪権は今のところ我々で握っていたい」

「了解です、ボス」

「私はこれから根回しに動く。留守を頼んだ」

「重ねて了解」

~~~~~

ニコラスは目を醒ますと、自分の体の具合を確かめ、海島の的確な怪我のさせかたにため息をつき、自分の魔法で傷を治した。

「????腹減ったな」

取り敢えず飯でも作ろう(既に昼になっていた)と思い四階の調理場に行く。とダイニングテーブルに座った西織と遭遇した。

「あ、昨日の女の子」

「あ、机の下敷きになってた人」

認識のされ方にニコラスは目頭が熱くなった。

「へえ、うちに護衛の依頼を」

「はい、ちよつと一悶着ありました」

ニコラスは適当にベーコンを焼きながらここに来たいきさつを聞いていた。

「で、自分のいた結社も消えて散々な目に遭ったと、そりゃたいへんだねえ」

「警戒しないんですか?確かに私は強くありませんけど、それでも魔術師の端くれですよ?」

「アーサー達が付いてないって事は、少なくとも急に暴れることは無いって判断なんだろ。なら、俺がどうこう言う理由にはならないな」

「信頼してるんですね」

「親友だからな」

「録音したぞ、今の」

「いつの間にかアーサーがテーブルについていた。」

「どわっ！お前いつの間に」

「実はお前がベーコンを焼き始めた辺りから聞いていた」

「完全に最初からじゃねーか！！！！っていつか、え？録音した？」

「『親友だからな』」

「ぐおおおおおおおお止めるマジで恥ずかしいから！！」

「『親友だからな』 『親友だからな』 『親友だからな』」

「てめえそのボイスレコーダー寄越せ、ぶっ壊すから！！！！！！」

「あの、ベーコン焦げてますけど」

「ほら、早く火止める俺と西織で食うんだから」

「さらりと俺のベーコン略奪してんじゃねえ！！ちくしょうあとで

覚えてるよ！！」

そういいながら追加でベーコンを焼いてきつちり三人分盛り付けるニコラス。何だかんだで善人なのだ。

「ニコラス、お前（俺にとって都合の）いいやつだよなあ」

「え？何だよいきなり」

「いやしみじみと（本当に俺にとって都合の）いいやつだと思って

「や、止めるよ、照れるぜ。そ、そんなこと言っただってボイスレコ

ーダーの事は許さねえからな！あとで渡せよ！！」

そう言いながらもガツガツと照れ隠しのようにベーコンを平らげていくニコラス。何となく括弧の中を察した西織が、苦笑いでそれを見ていた。

~~~~~

街を適当にぶらつきながら海島は思考を巡らせていた。

（確かプロメテウスの本拠地はギリシャだった？？？応援を読んだ

なら移動に一日、準備に一日つてとこでしようね。明日が勝負どころになる。西織博士が今どんな状況かは分からないけど、西織夕香との契約内容じゃ護衛が限界だし）

海島も慈善事業で西織を助けているわけではない。対価はせしめるし、対価以上の事はしない。彼女は何処までも仕事として割りきっている。

（博士は見つけてもスルー、もしくは追加契約の請求でもしましようかね。まあどっちにしる廃人同然だろうけど）

プロメテウスの尋問ならば、まともな人間は耐えられない。おまけに相手は政財界や学会に多大な影響を及ぼす怪物だ。何をしても、大抵の事は揉み消せる。

（仕込みは済ませたし、久しぶりの母国だし、少し羽休みしましようかね）

ひとまず今後の方針を決め、取り敢えずタバコでも買おうと自販機に近づくと

『タスポを タッチしてください』

「????? ああ？」

2012年現在、日本は海島の知っていた頃とは様変わりしたようである。

## 第四幕（後書き）

ニコラス君が登場するとテンポが良くなるので書きやすいです。

## 第五幕（前書き）

お気に入り増えてたー（＾Ｏ＾）！！！！！！

ありがとうございますー！！精進させて頂きますー！！！！

やっとバトルが…



## 第五幕

西織を『梟』が匿ってから二日目の夜、  
アーサーは『梟』の事務所のあるビルの屋上に佇んでいた。

既に時刻は11時を過ぎ、アーサーがここで歩哨を初めてから五時間近い時間が立っている。

それでもアーサーの警戒は欠片も緩んでいなかった。

そしてアーサーの耳がその音を捉えた。

こちらに近づいてくるのは小型トラックに偽装された特殊装甲車の群れだ。

ビルの狭間から見え隠れする編成を見る限り、恐らくは40〜50人程で編成を組んでいるのだろう。

一台の車両を四台の車両で囲むように移動している事を考えると、指揮官は中央の一台か。

狙撃を警戒してかビルを上手く盾にしながらこちらへ向かってくるそれを見て、アーサーは空中に手をかざす。

次の瞬間アーサーの周囲に巨大な鉄の塊が複数出現した。

エンドレス・マメント  
『千刃万弾』

アーサー固有の魔法であり、その効果は有りとあらゆる武器、兵器の類いを自在に生成、操作することだ。

生成可能な武器はナイフから戦術核ミサイルまで、この世の武器全てを網羅し、生成条件はアーサーがその威力、効果を把握していることのみ。

十分な魔力と知識さえあれば一人で世界を滅ぼすことすら可能な火力を有する、非常に強力な魔法だ。

今回アーサーが生成したのは、テロにもよく使用されるヘルファイアミサイル。

それを、

ビルごと撃ち抜くつもりで発射する。

撃ち出されたミサイルはツドオアツツッ！っという轟音を炸裂させ、ビルを崩して瓦礫を敵にぶちまけた。五台の装甲車は瓦礫の雪崩に飲み込まれて紙箱が潰れるようにひしやげて見えなくなる。

さらにそこにアーサーはグレネードを連射していく。瓦礫の山が噴火するように膨れ上がり、欠片を爆散させた。そして紅蓮の炎に包まれたビルの跡地から、

ゴッ！！という音と共に人影が飛び出してきた。

その数はおよそ30人程。

減ってはいる、

しかし30人近くが生き残る。

これが魔術師たちの戦い、

この世の理を超えてしまった者達。

そしてアーサーもその世界に身を置く一人だ。

五階建てのビルから飛び降りると、瓦礫から出て散開した敵を追う。こうして戦いが始まった。

~~~~~

「来たか」

『梟』の事務所所長室で海島は外の爆音を聞いた。

「ニコラスは依頼人クライアントの安全確保を、私はアーサーが討ち漏らした敵を叩く」

「了解、このビル使っちゃまっていいんですよね？」

「ああ好きにしろ。ただし荷物は壊すなよ」

「重ねて了解、ではお気をつけて。それじゃ西織、着いてきてくれるかな？」

ニコラスの声を背に、海島は防弾コートを羽織りながら足早にビルの外へ向かう。

血がたぎる、と呟いた口には引き裂くような笑みが浮かんでいた。

~~~~~

ニコラスは西織を連れてビルの中心部に來ていた。

「あの、ここで何を？」

「ああ、これからここを起点にビルそのものを作り替える」

そういふとおもむろにニコラスは両腕を壁に突っ込んだ。

驚く西織の前でニコラスの腕はまるで壁が泥でできているかのように滑らかに動く。

「俺の魔法は『マテリアルニユレート万物弄手』。触れた物質を好きに改造する魔法だ。建物を自由に『改造』するのが俺の十八番だね」

その言葉と同時に、ただの古びたビルが積層構造を備えたシエルターに変わっていく。

たちどころにして巨大な構造物を構築すると腕を壁から引き抜き、ニコラスは言った。

「とりあえず戦闘が終わるまで暇だし、飲み物でも飲むか？」

~~~~~

アーサーは路地裏を駆け抜ける。

出くわした敵には、挨拶がわりに周囲に展開したショットガンから高威力のスラッグ弾を叩き込むことで対処していた。

アーサーが探しているのは指揮官クラスの間人だ。戦いの要諦は頭

を潰すことに限る。統率を失えば自力で勝つていようが敗北は必死となる。

だが今回に限っては、おそらく相当の手練れが指揮官として参戦しているだろう。

潰すのは困難になる。

故にこの役目をアーサーが引き受けたのだ。

と、そこでアーサーの前に立ち塞がる人影があった。今までに倒したプロメテウスメンバーと同じ市街戦用の装備に身を包み、サングラスをかけたその男は、

「お前だな」

他の敵にはない、圧倒的なプレッシャーを発している。

「お前が、指揮官だな」

「アーサー・レッドフィールド君、君の噂は聴いているよ」

その男はサングラスを指で押し上げながら、

「私はアレクセイ・ルーンバルト。手合わせ願おうか？」

直後、

二人の化け物が激突した。

~~~~~

海島は変わり果てたビルの前から戦場と化した街並みを眺めていた。  
（おーおー、やってるやつてる。アーサーは頑張っているようだな  
これは臨時ボーンナスを出してもいいかもしれん）

そんなことを考えていた海島が徐に首を傾けると、先程まで海島の首があった場所のすぐ後ろの壁に飛来したナイフが突き立った。  
何らかの魔法か、はたまたナイフに仕込まれた機械の効果か、ナイフの刃は高速振動しており、蜂の羽音のような耳障りな音を発しながら易々とコンクリートを切り裂いていく。

「……こりゃボーンナスは無しだな」

命の危機というよりナイフの立てる音に不快さを感じて、海島は敵を討ち漏らしたアーサーに八つ当たりをする。顔を上げると15人近い敵がいた。敵は一斉にこちらに魔法を放とうとする。対して海島はタン、と短く足踏みをした。それだけだった。

たったそれだけで15人の魔術師が勢いよく地面に叩きつけられた。

「さあって、これで終わりじゃないだろう?」

海島は、

口よ裂けよとばかりに笑って

「さっさと立って攻撃してこい。その度に絶望させてやるよ」

~~~~~

アーサーはアレクセイから距離を取りつつ、ショットガンの弾丸を散弾に切り替えて連射する。

相手はこちらの名前を知っていた。ならば、自分の魔法に対しても対策を練っている可能性が高い。不用意に接近するのではなく、牽制と様子見を兼ねた攻撃だったのだが

「無粋だな」

先程まで前にいたはずのアレクセイが、いつの間にか自分の後ろに回っている。

「!?!」

アーサーは身を捻ることでアレクセイの方を向こうとするが、

「こちらが会話をしようとしているのだ、鉛玉の前に言葉を返すのが礼儀ではないかね?」

再びアーサーの死角に一瞬で潜り込んだアレクセイが足を払うよう

に蹴りを放つ。

倒れ込んだアーサーだが、アレクセイに向けてカポエラのように蹴り足を繰り出す。惜しくもかわされたが、蹴りの反動で起き上がった。

「その魔法、時空系か」

「ほう、今のやり取りだけで断言するかね。加速系や幻惑系という可能性もあるだろうに」

「加速系なら俺を蹴った時に使うだろう。幻惑系なら足跡はできない。場の状況を見るに何らかの時間操作と見るが、どうだ？」

「…素晴らしいな、これだけでそこまで看破するとは。殺すのが惜しくなってきた」

「随分な自信だな」

「それを知られた所で私の優位は揺らがんからな。こちらは君の魔法を知っているのに、君は私の魔法が時間操作と知れただけ。どちらが有利かなど、論ずるまでもあるまい」

確かにアーサーはアレクセイの魔法を掴みかけている。しかしそれでは対策は立てられない。

ざり、と音を立ててアーサーの足が後ろに動こうとする。

一度逃げるつもりか、とアレクセイがわずかに身を乗り出すと、

ドンツ！と、そのままアーサーは突進してきた。

「なっ!?!」

アレクセイは驚愕したが、自分の魔法を発動してアーサーの後ろに回り込む。

(この程度でやられるとでも思ったか!?!)

しかし、そこでアレクセイは気づいた。

アーサーの背中越しに見えるガラスの欠片に―――笑むアーサーの顔が映っているのを。

「ッ!?!?!」

アレクセイが悪寒を覚えて飛び退くのと同時、アーサーの背中側にナイフが出現し、勢いよく放たれた。

「グッ……」

獣のように身構えるアレクセイは喉を抑える。

頸動脈付近に薄らと傷がついていた。

「見破ったぞ、お前の魔法」

アーサーは笑う。

タネが割れば条件は互角。否、自力で勝るアーサーの方が有利か。その時、出し抜けにアレクセイの持っていた通信機から声が聞こえた。

『もしもし、私は『梟』の海島と言うもんだ。現在生き残っているプロメテウスメンバーに告ぐ。あんたらの仲間は私がかた片付けた。同じ目に遭いたくなけりや、降伏しな。……ってあれ？ 答えがないって事は全滅させちゃったかな？』

(…潮時か)

これ以上戦った所でアーサーに勝利する事は難しいだろう。ならばさっさと逃げるのが良策だ。

「済まんが、逃げさせてもらうよ。もはや戦う意味は無さそうなのでね」

「逃がすとも？」

「逃げれるさ、こうすればな!!」

アレクセイがピンを抜いて放り投げたのは

「手榴弾!？」

咄嗟にアーサーは物陰に飛び込む。

爆風が炸裂し収まったときにはアレクセイの姿は消えていた。

「クソツ逃げやがった!」

アーサーは苛立たしげに地面を蹴りつける。

こうして不完全燃焼のまま、魔術師の戦いは終わった。

~~~~~

~~~~~

アーサーはひとまず元『梟』事務所ビルに戻った。

「アーサー、討ち漏らしにうるさいのがいたぞ。不快だったから今回はポーナス無しだ」

「何時もどれだけ努力しても、そんなものは貰った覚えがありませんが…今回はこれで終わりなんでしょうか？」

「バカが、捕らえた奴等から聞き出した基地に殴り込みを掛けなきゃならん。楽しいお仕事はまだまだあるぞ」

「やれやれ…ニコラス！移動だ、出てこいよ！」

言葉と同時にシエルターの前が開き、紅茶を飲んでいるニコラスと西織が出てきた。

「…西織はともかく、何でお前そんなくつろいでんだよ」

「私達が戦ってた間、ずっとまったりしていたというのは腹が立つな。よし、減俸にしよう」

「ええ！？だって安全確保って命令されたじゃん俺！」

何時もの掛け合い（アーサーと海島は本気）に西織が笑っていると

「和やかな所、失礼させてもらおうか」

くたり、と西織の体から力が抜ける。

西織の首筋に当て身を食らわせ、気絶させたのは

「アレクセイ・ルーンバルトツ…！！」

「あくまで私の目的は西織夕香の回収だ。アーサー君、君を倒せなくとも問題はないのだよ」

「ボス…！！」

言葉に反応して、海島が魔法を発動させるも、アレクセイはすでに離脱していた。

「不味いッ…！このままじゃ西織が…！」

「それだけじゃない」



「え？」

「忘れたかア―サー、お前に命じて西織に飲ませた毒の事を」

「ッ…！」

「カプセルの溶解まで後二時間から三時間、その間に解毒薬を射たなければ」

西織は、死ぬことになる。

## 第五幕（後書き）

この通り基本的に魔術師というものはチートです。

世界中で様々な魔術結社が微妙なパワーバランスを保っているので、世界は滅びていません。

世界各地で起こる魔術師同士の戦いで起こる破壊は国が情報処理しています。

国は魔術師が国中に溢れかえったら秩序も糞も無くなるのでその存在を秘匿しています

アーサーの千刃万弾はF a t eのギルガメッシュのゲートオブバビロンを想像していただければ。

## 第六幕（前書き）

ネットワークのバグで一度小説が全部吹っ飛びました：死ぬかと思  
った。

## 第六幕

「う…」

薄暗い部屋の中で西織は目を覚ました。

辺りを見渡そうとして首がベルトのような器具で固定されているのを知る。

(これ…拘束衣?)

ご丁寧に全身を固定し、専用の器具で体を直立させているらしい。口と目が自由になっているのは尋問の為か。

アーサーに飲まされた毒が回っていないと言うことは、気絶して半日、ということはなさそうだ。

西織はアーサーの渡してきたカプセルに毒が入っていることに気付いていた。

それでもカプセルを飲んで見せたのは信頼関係を築き、疑われて余計な詮索をされない為だったのだが…

(裏目に出たかなあ)

と、ガシャンという音と共にスポットライトのような照明が付いた。闇の中から浮かび上がったのは、

「アレクセイ・ルーンバルト…」

「非礼は詫びんよ、こちらも些か苛立たされているのでね」  
サングラスの奥からアレクセイは西織を睨む。

「私は唯一つの問いを君に訊き、そして報復するためにここにいる。安心したまえ、胃の中のカプセルは処理させてもらった。時間は幾らでもあるぞ。」

存分に答えてもらおう、西織夕香」

そしてアレクセイは身を乗り出して問う。

「いかなる理由によって君は我が親友にして上司、そして君の父親たる西織京二博士を殺害したのかね？」

~~~~~

「西織が父親を殺したあ!？」

車を運転しながら、ニコラスはすつとんきょうな声をあげた。

「ええ、さつきPCに西織夕香の調査報告が届いたの」

海島は画面をスクロールして、届いた書類を読み進めていく。

「西織夕香の父、西織京二博士は一週間前に死亡している、他ならぬ西織夕香の手によってね」

「おいおい…一体どういうことなんだよ。」

「西織夕香は父親が創設者であり、トップでもある魔術結社『暁』に所属していた。」

でも、西織京二はプロメテウスのメンバーでもあったのよ。」

「西織の父親がプロメテウス…?」

「西織は魔術を親に教わりながら、プロメテウスに所属することを許されていなかった。」

というより、ひたすらに西織京二がプロメテウスの存在を秘匿していたようね。

その理由は何か分かる?アーサー」

「危険視したのではないですか?自分の娘の事を」

「正解。西織京二は紛れもない天才だった。でもね、西織夕香はそれを越える鬼才、としか言い様のない大天才だったのよ。」

弱冠十二歳で学会に論文を発表、その論文は今世紀最高の論文と言われるほどに完璧な代物だったそうよ。添付された資料を見てみただけど、十二歳が書いたとは到底信じられない物だった。

そして学会は一気に西織夕香に注目した。親の西織京二を差し置いて、ね。

魔術を教えたのはまだ西織夕香が六歳の頃だったらしいのだけれど、娘の才能が注目されてから西織京二は恐れ出した。プロメテウス内

における自分の地位を脅かされることをね。

だから西織京二はわざわざ自分で結社を作り、娘をそこにに入れて監視した。」

娘がプロメテウスに接触しないように、

娘が自分を脅かさないように。

「たしかプロメテウスの目的は『この世の全てを叡智をもって解き明かすこと』だったか。」

「ええ、だからあそこは優秀な科学者ほど権勢を誇ることになる。

西織京二は焦ったでしょうね。」

娘を監視し続けて、西織京二はさらに追い詰められていった。娘を放置していれば目をそらす事くらい出来たでしょうに、その才覚を目の当たりにし続けたのだから、当然と言えばその通りだけ。最終的には娘を殴り付けることも珍しくはなかったみたいね。

そして西織京二の死後、『暁』はプロメテウスの情報処理部隊によって解体された。西織は嘘は吐いていなかったわけね」

「しかし西織が父親を殺した？話を聞くほど、そんなことになる前に逃げるくらいの事はしそうですが？」

「いいえ、事態はもう少し複雑なの、

西織夕香はね、父親を溺愛していたのよ」

~~~~~

「父さんは私を何度も殴ったわ。でもしかたがないの、悪いのは私だから。」

私が悪くから父さんは私を殴る。それは段々エスカレートしていった。

あの夜、

私は父さんに首を絞められた。

ああ、死ぬなつて分かって、その時に唐突に思ったの  
生きたい、  
生きて、全てをやり直したい。  
そんなときに私の魔法が発現したの」

~~~~~

「『タイムリープ  
时空復路』」

海島は言う。

「恐らく西織夕香はこの魔法によって、自分の人生を幾度もやり直  
している。」

実際関係者が西織の『予言』が当たるのを何度も見たそうよ。

『やり直し』の手段があるにも関わらず、溺愛する父を殺した。

それがどういう意味分かる？」

海島は部下に問いかけ

「そんな絶対的な手段があつてなお、再挑戦する気力を無くすほど  
に失敗したということよ」

~~~~~

「ねえ、私が父さんを殺すこの人生に辿り着くまで、どれだけの時  
間を過ごしてきたと思う？」

父さんに嫌われないために、私が費やした努力が分かる？」

私は何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何  
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何  
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何  
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何  
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何





父さんがどんなに優しく微笑んでくれても、

私は私を殺そうとする父さんを思い出す。

きっと私は、もうとつくに壊れちゃってたんだよ。

だからあの時、今度こそ終わりにしようって思ってた。

父さんに殺されようって、

だから最後の人生は自分の好きなように生きたわ。

良いでしょう？私の人生なんだから。

そうして、借りたアパートに父さんが訪ねてきたとき、

これで終わりだなって思った。

でも、意識が遠退いていくときになって、

急に怖くなった。

だって、これで終わりになるんだよ？

私は何百年も生き抜いた意味、全部消えちゃうんだよ？

だったらもう、父さんを殺して、生き延びるしかないじゃない。」

そして、アレクセイは

「それが、西織京二が死んだ理由かね？」

彼はまるで動じていなかった。

全く揺らいで、いなかった。

予想していたわけではない。

ただ、報復。

そののみを目的とするが故に、アレクセイは動じない。

そんなアレクセイに西織は、

にっこりと、

清々しく笑いかけた。

「ふう、なんだか話したらスッキリしちゃった。相談するのは悩み

に一番いいって言うけどホントだね うん、じゃあ、もういいや、

私は父さんに殺されるのが嫌だったただけだし、もうこの際殺してく

れてもいいよ？」

この瞬間、

アレクセイ・ルーンバルトは背筋を冷たくした。

生きたい生きたいと叫んで父親を手に掛けながら。

少し他人に話しただけで死ぬことを受け入れる。

そんな、生き死にの感覚が根幹から狂った目の前のナニカが、

ただ、ひたすらに気持ち悪い。

「お前の処分は、追って伝える」

「ええ〜この格好結構辛いんだよ？」

童女のような雰囲気で、憑き物が落ちたように陽気になった西織の

声を背にアレクセイは足早に部屋を立ち去る。

背筋の寒気は、しばらく収まりそうになかった。

~~~~~

「と、まあ西織夕香についてはこんなところね。

恐らく奴はこの世界にたどり着いた前後で狂った。

もう『やり直し』は無いでしょうね。

で、なにか感想は？」

「率直にいつてよろしいでしょうか？」

「ええ。何？アーサー」

「こんなどうでもいい話をする必要がありましたか？」

「アーサーの言う通りだよなあ。こんな話を聞いたところで俺達がやんなきゃいけないことは変わらねえ。依頼に従いアイツを生かすそれだけだ」

「くっ…ははははは！いいわね、あんたたち、流石私の部下。ニコラス！後どのくらいで着く？」

「ダミーは捨てられました。が本命は生きてますよつと。もうすぐ見

えますよ」

そう、あのカプセルはダミー、本命は西織に飲ませた紅茶に混入させたナノマシンだ。

ニコラスの魔法によって作られたそれは、世界最小の分子サイズの機械である。

人体に摂取させると血中に潜り込み、神経細胞を利用してネットワークを形成、血流や体温をエネルギー源にして量子ビームで衛星と交信を行う。

また、体内に拡散するその性質から、発見したところで除去は自然に体外に排出されるのを待つしかない、と極めて高性能な発信器となっている。

故に最初からアーサー達は西織の場所を掴んでいた。

「おっ、あの工場だ。ボスー、見えましたけどどうしますー？」

ふん、と海島は少し考え、

「このまま突っ込め」

(西織め、支払い前に逃げられるとでも思うなよ)

海島がニヤリと笑う、

直後、プロメテウスの基地に装甲車が突入した。

## 第六幕（後書き）

後二話で一章終わりです。

書き直すのは地獄でした…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0428z/>

---

硝煙の魔法

2012年1月6日17時52分発行